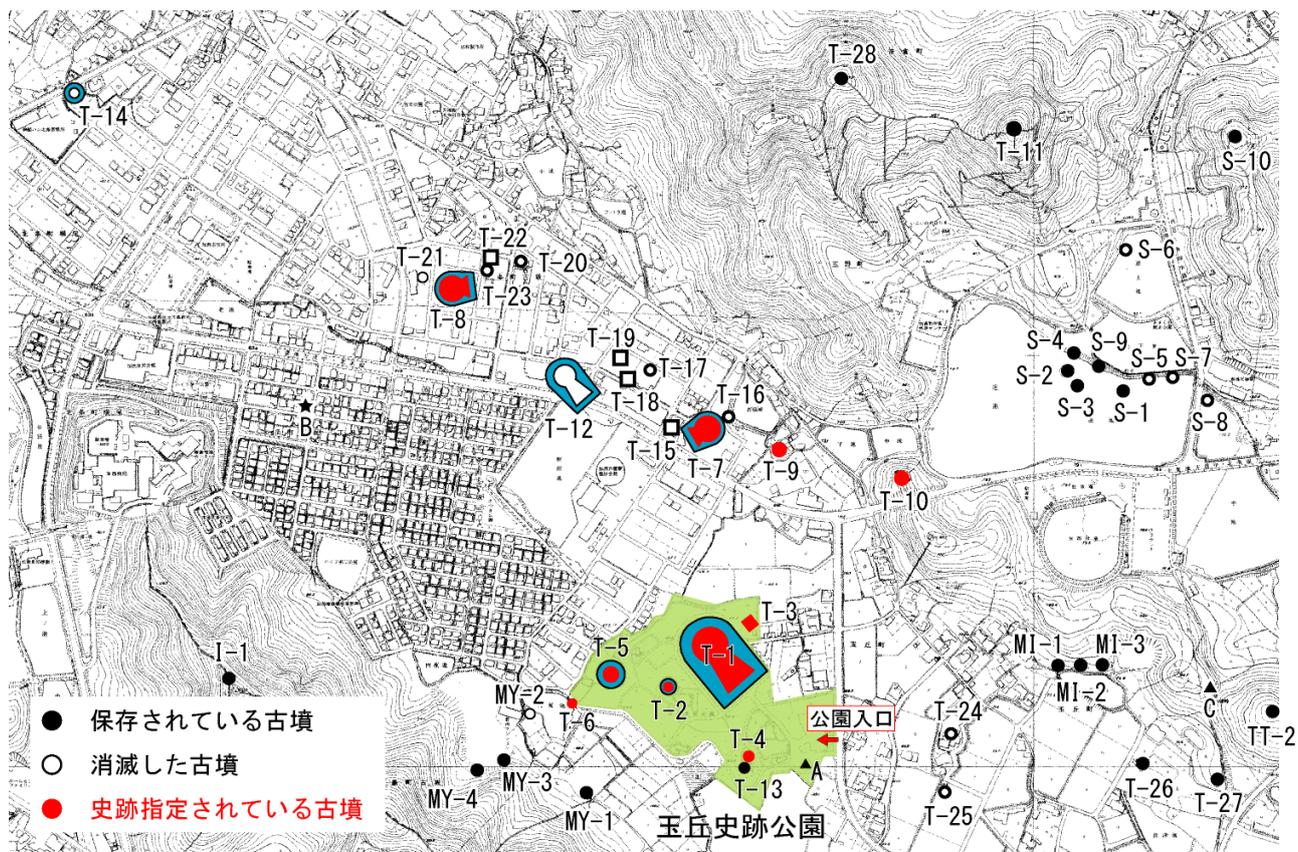


3. 史跡玉丘古墳群の概要

(1) 玉丘古墳群について



No	古墳・施設名称	No	古墳・施設名称	No	古墳・施設名称
T-1	玉丘古墳	T-18	黒福4号墳	S-7	逆池7号墳
T-2	玉丘古墳陪塚1号墳	T-19	黒福5号墳	S-8	逆池8号墳
T-3	玉丘古墳陪塚2号墳	T-20	芝中1号墳	S-9	逆池9号墳
T-4	壇塔山古墳	T-21	東長本1号墳	S-10	笹倉1号墳
T-5	クワンス塚古墳	T-22	東長本2号墳	MI-1	宮池1号墳(稲荷古墳)
T-6	実盛塚古墳	T-23	東長本3号墳	MI-2	宮池2号墳
T-7	マンジウ古墳	T-24	玉丘祇園山1号墳(地藏堂古墳)	MI-3	宮池3号墳
T-8	笹塚古墳	T-25	玉丘祇園山2号墳	MY-1	南山1号墳
T-9	逆古墳	T-26	宮ノ前古墳	MY-2	南山2号墳
T-10	北山古墳	T-27	浜津池古墳	MY-3	南山3号墳
T-11	亀山古墳	T-28	池ノ内古墳	MY-4	南山4号墳
T-12	小山古墳	S-1	逆池1号墳	TT-2	玉野寺山2号墳(庚申山古墳)
T-13	芳ヶ端下古墳	S-2	逆池2号墳	I-1	石山1号墳
T-14	ジヤマ古墳	S-3	逆池3号墳	A	愛染古墳(移築された古墳)
T-15	黒福1号墳	S-4	逆池4号墳	B	加西市埋蔵文化財整理室
T-16	黒福2号墳	S-5	逆池5号墳	C	山伏峠石棺仏
T-17	黒福3号墳	S-6	逆池6号墳		

図 3-1 玉丘古墳群とその周辺

3. 史跡玉丘古墳群の概要

加西市玉丘町から北条町古坂にかけての一带は、古墳が点在するところとして古くから注目されてきた。とりわけ、玉丘古墳は『播磨国風土記』に仁賢・顕宗天皇との婚姻説話が伝えられる根日女の墓とされ、『風土記』の記載を実感できる場所として受け取られている。ただし、玉丘古墳の年代は4世紀末頃に位置づけられ、仁賢・顕宗天皇の6世紀初めとは100年以上の開きがあり、風土記の内容をそのまま史実とすることはできない。

しかし風土記編さんが行われた奈良時代の初め頃に、傑出した規模をもつ玉丘古墳の被葬者として、仁賢・顕宗天皇即位前の流離譚と結びついて理解することが行われていたと考えられる。古墳をめぐる伝承の形成という点からも興味深い。

さて、玉丘古墳は全長109mをはかる前方後円墳であり、後円部の墳頂には盗掘坑があり、そこに長持形石棺が露出している。長持形石棺は、仁徳陵（大山）古墳の前方形部においても発見されているように、古墳時代中期の権力者を象徴する棺である。玉丘古墳の長持形石棺は、破片として一部が残っているに過ぎないが、その復元的検討から、初期の長持形石棺である津堂城山古墳（大阪府藤井寺市）の例によく似たものであることが想定されている。

盗掘坑の発掘調査結果からは、石室を構築せずに石棺を埋める形式の埋葬であることが明らかになった。墳丘は3段に築成され、斜面の間に設けられた平坦面には円筒埴輪がめぐる。斜面には、石を密に葺きならべる葺石を施しており、典型的な大規模前方後円墳であることがわかる。円筒埴輪には野焼きで作られたことを示す黒斑がみられ、この古墳の時期を推定する手がかりとなっている。

古墳の周囲には周濠がめぐり、その平面形は盾形になっている。周濠の調査では、家形や水鳥形の埴輪も出土している。周濠の外堤上にも円筒埴輪がめぐらされていた。

玉丘古墳の周辺には多くの古墳が分布している。芳ヶ端下古墳など後期後半に属するものもまじえるものの、多くは中期に位置づけることができる古墳である。分布する古墳の時期からは、4世紀末から6世紀初めにかけて一連の造墓活動がおこなわれていたと判断できる。早くに開墾などにより変形されているものが多く、調査も一部にとどまっておらず、全体像を明らかにすることは難しいが、主要な古墳の位置づけについて、可能な限り見ておくことにしよう。

玉丘古墳がこの古墳群の最初のものであることはほぼ確かである。続く古墳としては五世紀前半に位置づけられる小山古墳が挙げられる。この古墳は、玉丘古墳の北西約500mに位置し、早



図 3-2 史跡玉丘古墳群



図 3-3 芳ヶ端下古墳石室床面

くに削平されていたが、調査の結果、周濠が前方後円形にめぐり、後円部の葺石も確認されたことから、全長 79mの前方後円墳になることが明らかとなった。周濠からは埴輪が出土しており、造り出しとみられる張り出し部の周囲からは須恵器も出土した。その須恵器はいわゆる初期須恵器の範疇に含まれるもので、埴輪とともに年代を考える材料となっている。

5世紀中頃にはマンジュウ古墳や笹塚古墳など、短小な前方部をもつ帆立貝式古墳が築かれる。マンジュウ古墳は、小山古墳の北東に位置し、全長約 46mをはかり、南側のくびれ部付近に小さな造り出しをもつ。その周辺からは須恵器の甕が出土しており、小山古墳と同様、造り出し上の祀りに須恵器が用いられたことを推測させる。

笹塚古墳は、小山古墳よりもさらに西に位置し、調査の結果、短小な前方部が確認され、帆立貝式古墳であることが確定した。

全長は 43.5mに復原され、マンジュウ古墳と同様の位置に造り出しをもつ。中心埋葬は竪穴式石室で、床面が断面 U 字状になることから、割竹形木棺を安置していたと推測できる。マンジュウ古墳と笹塚古墳の新旧関係を決めることは難しいが、それぞれに伴う埴輪や周辺の古墳の展開から、笹塚古墳をやや古く考えるのが妥当であろう。玉丘古墳群では、帆立貝式古墳がいずれも 5 世紀中頃に比定され、同時期では最大級の古墳となることから、地域の最有力者の墓が前方後円墳から帆立貝式古墳に移行することがうかがえる。

クワンス塚古墳は、玉丘古墳の西約 160mに位置する直径 35mの造り出し付き円墳で、墳頂部の平坦面を円形にめぐる埴輪列があり、墳頂部の中心付近で竪穴式石室が確認されている。割竹形木棺を安置していたと推測でき、主体部からは鉄製武器、短甲、盾隅金具、農具などの副葬品が出土している。このほか造り出しからは壺形や笄形のミニチュア土器と鳥形や杵形、円盤形などの土製品が出土した。時期的にも近い行者塚古墳の西造り出し上で発見された土器や土製品と似た構成であり、古墳時代中期の古墳祭祀をうかがわせる資料として注目される。年代的には、笹塚古墳などの帆立貝式古墳に先行する 5 世紀前葉に比定でき、玉丘古墳に続いて営まれたと考えられる。



図 3-4 黒福 1 号墳

以上に触れた中規模の古墳以外にも、さらに小型の古墳が同時期に築かれている。マンジュウ古墳の北東側に接する黒福 2 号墳は、直径 24mの円墳に復原され、周濠からは 5 世紀中頃にさかのぼる須恵器が出土している。その器種には高杯や把手付き椀のほか、二重はそうと呼ばれる特殊な形態の容器がある。マンジュウ古墳の南西に隣接する黒福 1 号墳は、一辺約 10mの方墳であるが、埴輪をもっており、周濠からは須恵器の把手付



図 3-5 黒福 2 号墳

き有蓋壺が出土し、黒福 2 号墳と同様の年代に位置づけられる。このほかマンジュウ古墳と小山古墳の間に位置する黒福 3 号墳、4 号墳、5 号墳のいずれもが埴輪と須恵器を出土し、5 世紀中頃から後半にかけての時期に比定できる。以上の古墳は、規模が小さいながらも埴輪を持つ点、比較的古い段階の須恵器を出土する点で特筆でき、玉丘古墳群全体の構成を考える上で重要な位

3. 史跡玉丘古墳群の概要

置を占めている。

玉丘古墳群の範囲については、いくつかの括り方がある。最も狭くとして、玉丘古墳から西方にかけて笹塚古墳あたりまでに限る範囲は、玉丘古墳群の中核にあたる部分として理解できる。しかし、その周辺にひろがる古墳についても、玉丘古墳との関連が無視できないものも多くあり、とくに東の尾根上に位置する亀山古墳や北山古墳、またその麓の逆池古墳群も、中期に展開する古墳であり、玉丘古墳群の動きと密接な関係をもっている。

さて、その亀山古墳は、昭和12年に地元の笹倉町の有志によって発掘が行われ、その後、京都大学から梅原末治が来て調査を行った古墳であり、加西市域における本格的な遺跡調査の始点として著名な古墳である。このときの調査では、主体部の石蓋土坑が明らかとなり、内部から半円方形帯神獸鏡、短甲、肩庇付冑、鉄製武器、鏃などが出土し、その多くが東京国立博物館に収蔵されている。平成16年には加西市教育委員会を主体とし、市史編さん委員会も加わる形で発掘調査が行われた。

調査の結果、まず古墳の墳丘が長径48m、短径44mのやや楕円形の円墳であることが確定し、葺石をまったくもたず、地山の岩盤が露出する姿であることが判明した。墳丘の裾に円筒埴輪をめぐらせるが、数本に一カ所、木柱が立てられていたことが明らかとなっている。そして、墳頂部では、昭和12年に発掘された石蓋土坑に接して、副葬品専用の木箱が設置されていることが新たに判明した。この木箱は長さ3.5m、幅0.4mで、断面形が楕円形に復原できる。内部には、北端近くに、向きを違えた鉄鏃の束が置かれ、その出土状況から矢を納めた矢筒が5個あったと推測できた。中ほどに大型の鉄鏃があり、南には鉄鎌、鉄斧などの農工具や砥石のほか、鉤付きの箱に復原できる遺物が出土している。なお、墳頂部にはこの第一埋葬のほか、小型の第二埋葬施設が存在する。古墳の時代は、甲冑から推測される年代観と埴輪の年代観を総合して、五世紀後葉を中心に考えることができる。

昭和12年と平成16年の発掘の結果、亀山古墳の埋葬施設の全容が明らかとなり、その副葬品についてもほぼ全体が把握できることとなった。盗掘を受けたり、調査がひかえられることなどにより、副葬品すべてが明らかになる大規模古墳が極端に少ない中で、亀山古墳の調査成果は、たいへん貴重な事例となる。ここで注意されるのは、第一埋葬における、石蓋土坑と副葬品箱との内容の相違である。すなわち、鏡のほか甲冑や刀剣などはもっぱら石蓋土坑に納められ、農工具は副葬品箱にのみ入れられていた。両者の違いは、埋葬施設の使い分けや、副葬品に対する取り扱いの違いが表れていると考えられ、当時の人々の意識を物語るものと言える。また、全体を通して玉類が見られないこともこの古墳の特徴であり、甲冑を副葬する古墳の性別の特徴からも、被葬者が男性である可能性が高い。

亀山古墳の特徴として、その立地もまた重視できる。標高160mの山頂に位置し、眺望がよく開けるといふ特徴がある。玉丘古墳の場合、北条町を中心とする河谷の東端の分水界に位置し、



図 3-6 ジヤマ古墳



図 3-7 逆池9号墳埴輪列

北条町方向への眺望がよく開けているのに対し、亀山古墳は、かえってその方向の眺望は開けず、かわりに在田地区や富合地区、九会地区など、万願寺川流域に広い眺望が開け、遠くには加古川流域も遠望することができる。このような眺望の違いは、玉丘古墳と亀山古墳とがその背景としたエリアに違いがあったことをうかがわせ、亀山古墳の被葬者を玉丘古墳からの系譜を引くものとして理解することを難しくしている。同じ玉丘古墳群の中に位置づけるとしても、このような違いについては十分に留意しておく必要がある。



図 3-8 亀山古墳

さて、亀山古墳から丘陵を玉丘古墳の方に下っていくと、尾根の先端に北山古墳が位置している。この古墳は直径 26mの円墳であり、テラスを設けて円筒埴輪がめぐらされているが、裾に埴輪列は存在しない。1 段目、2 段目の斜面には葺石が施されており、亀山古墳とは異なっている。墳頂部には、長辺が 2.3 メートル、短辺が 1.0mの比較的小型の竪穴式石室があり、中から武器、馬具、玉類が出土している。出土した埴輪や須恵器の時期から 5 世紀末～6 世紀初頭に比定でき、ほぼ同時期と推定される逆古墳（径 30m）とともに、玉丘古墳群の一連の造墓活動の中では最も新しいものとすることができ、一連の造墓活動がひとまず終息する段階として評価することができる。

玉丘古墳群は、4 世紀末の玉丘古墳によって突如始まり、5 世紀末の北山古墳に至るまで比較規模の大きな古墳をまじえて次々と有力者の墓が営まれており、典型的な中期の大規模古墳群とすることができる。その最も有力な階層は、玉丘古墳や小山古墳のように前方後円墳を採用していたものの、五世紀中頃からは帆立貝式古墳や大型円墳を墓として採用していくこととなる。そして、特徴的なのは黒福 1 号墳、3 号墳、4 号墳、5 号墳のように、ごく規模の小さな同時期の古墳をまじえて展開している点であり、亀山古墳の場合も山麓の逆池古墳群に中期から後期にかけての中小規模の円墳が見られ、同様の構図と見ることができる。そして、用いられる埴輪にも違いがあり、笹塚古墳や亀山古墳では、突帯を三条めぐらせる四段構成の円筒埴輪が用いられるのに対し、ほぼ同じ時期の黒福 1 号墳では、3 段構成の小型の埴輪が用いられ、古墳の規模に応じて使い分けがされていることがわかっている。

規模や墳形の異なる古墳が共存する姿は、中期の大規模古墳群ではむしろ一般的である。吉備の造山古墳、作山古墳を中心とする古墳群が典型的であり、京都府城陽市の久津川古墳群も典型的な例として知られている。このような古墳群の構成については、地域社会の階層性が凝縮された姿とみる見方が有力であり、一定の身分秩序を墓によって表示する方法が確立していることがうかがえる。その点では、大王墓を抱える古市古墳群や百舌鳥古墳群もまた多様な墳形と規模の古墳の集合体として捉えられ、古墳の複合状況のまさに典型とすることができる。頂点に位置する古墳が応神陵（誉田御廟山）古墳や仁徳陵（大山）古墳のように隔絶した規模をもつ点が違いとなるけれども、各地にはその縮小版としての、多様な墳形、規模の古墳で構成される古墳群が五世紀に展開していると評価できる。

播磨においては、姫路市の壇場山古墳を中心とする古墳群がその典型であり、玉丘古墳群よりも古墳の数では少ないが、全長 140mの前方後円墳である壇場山古墳が五世紀前葉に営まれ、そ

3. 史跡玉丘古墳群の概要

の後も長持形石棺を納める一辺 55mの山の越古墳など有力者の古墳が続き、宮山古墳のような大規模円墳が混じることもまた共通点とすることができる。

このような中期の古墳群は各所にあったと考えられ、加古川市の西条古墳群と平荘湖古墳群に展開する中期から後期はじめの古墳が該当し、前方後円墳の行者塚古墳ののち、帆立貝式古墳の人塚古墳や造り出し付き円墳の尼塚古墳へ移行する展開も玉丘古墳群の展開に似ている。また小野市においても、現存する王塚古墳から敷地大塚古墳にかけての一带に、かつて数多くの古墳が存在し、大部古墳群として把握されている。前期末の敷地大塚古墳や中期前半の王塚古墳の時期を勘案すると、玉丘古墳群に併行する時期に営まれていることがわかる。これらの例から、地域ごとに政治的な権力が成立し、その構成メンバーが身分を表示しつつ墓域を形成した状況を推測することができる。

また、玉丘古墳群の特徴として、その成立の唐突さを挙げることができる。他の地域でも同じような特徴が指摘でき、首長墳の交替現象として捉えられてきている。加古川流域では、前期の日岡山古墳群の終息と、隣接する西条古墳群（ともに加古川市）の成立がそのよい例であり、墓域の移動か勢力の交替かということが議論の論点になっている。壇場山古墳の場合も、南にやや離れて御旅山古墳や兼田大塚古墳など、前期の前方後円墳があるが、時期的に空白があり、墓域の移動と単純に考えることは難しい。玉丘古墳群のように墓域の移動による成立がほとんど考えられない事例があることを考慮すると、やはり4世紀末から5世紀初めにかけて勢力交替が各地にあり、それが古墳の消長に表れていると見るべきであろう。

それぞれの地域で墓域を形成する首長たちが、ヤマト王権とどのような関係をもっていたかもまた議論の分かれるところである。すなわちヤマト王権の権力が地方に及び、首長たちが服従していたとみるか、あるいは「地域国家論」に代表されるように、地域ごとの王権が一定の力を持ち、独立性を保っていたとみるか、という見方の違いがある。各地において一定の秩序をもって大規模古墳群が形成されている状況からは、地域王権とも言うべき自律的な政体ができている可能性が考えられる。5世紀には、様々な文物や技術が朝鮮半島との交渉を通して導入されたが、筑紫や吉備の事例からは、ヤマトを介さずに直接的にもたらされた文物や技術が数多くみられ、このような対外交渉においても地域王権の主体性をうかがうことができる。

この時期の各地の首長とヤマト王権との関係をうかがわせる仕組みとして府官制が挙げられる。府官というのは、中国の皇帝によって將軍や大守に叙せられた実力者が、自ら政府を組織して統治にあたる仕組みを言う。日本列島の場合も、中国に朝貢した倭の五王が、自らとともにその属僚たちにも官爵を与えられるよう申請しているので、倭王を中心とした府官が成立していた可能性が考えられている。古市古墳群や百舌鳥古墳群にみられる大王墓を頂点とした古墳の階層構造は、そのような政治組織の反映とも考えられ、またそれらの縮小版と言える中期の古墳群が各地に形成されていることから、地域の首長層たちも府官制の中で倭王の属僚に位置づけられた状況を想定しうる。ヤマト王権が国家へと歩みを進めていく上で、府官制を紐帯とする大王と地域首長との関係が重要な役割を果たしたものと推測される。

玉丘古墳は、針間鴨国造と大王家の婚姻関係を伝承としてとどめていた。先にも触れたように、その年代的な関係からは事実として受け取ることができないが、この地域とヤマト王権との関係を記念する遺跡として、玉丘古墳が記憶されていた可能性は否定できない。『播磨国風土記』の説話の背景として、ヤマト王権との関係を保つ地域首長の成長を想定することが許されよう。

(加西市史 第1巻 本編 I 考古・古代・中世)

(2) 各古墳の調査結果

1) 玉丘古墳

玉丘古墳群の中で南側丘陵から派生する標高 69mの段丘尾根の先端部に立地する。古墳の現況は、明治初期の盗掘により後円部墳頂部に大きな盗掘坑が開いている。刀剣や玉類が出土したと伝えられるが、遺物は伝わっておらず、詳細は不明である。墳丘部は雑木が繁茂しているが、保存状況も良く、古墳形状も保たれている。周濠部は水をたたえ農業用水として活用されている。墳丘は前方部、後円部とも3段築成であり、下段のテラスが標高69.5(後円部)~70.5m(前方部)、上段のテラスが標高71.5(後円部)~72.5m(前方部)あたりにめぐり、いずれも前方部から後円部に向かってゆるやかに降っている。テラスの幅は前方部前面で下段が約 3.5m、上段が約 2.5m程度になる。後円部上段の直径は約 38m、中段の直径は約 52mとなる。また、前方部先端部での上段幅は約 26m、中段幅は約 41m、くびれ部での前方部上段幅は約 16m、中段幅は約 24mである。

後円部墳頂部の平坦面は、直径 10.5mほどあり、最高所の標高は 78.65mである。中央に南北 8m、東西 5m、深さ 2mほどの盗掘坑がある。後円部から前方部にかけてはスロープが形作られ、前方部墳頂部の最も低い地点(標高約 75m)は、後円部中心から前方部側に 25mほどの位置にあり、墳丘裾のくびれ部に対応する。前方部墳頂部は、そこから先端に向かって高くなり、その最高所の標高は 76.8mである。前方部墳頂部の幅も先端近くで最も広く、12.0mをはかる。

後円部中央の埋葬施設盗掘坑底には凝灰岩製の長持形石棺の石材が一部残っている。墓壇の底は石英質の白石による礫敷であったと伝えられている。石棺の内法は長さ 2m、幅 1.1mをはかり、墓壇内に石棺を直におさめた石棺直葬と考えられる。

墳丘の裾は水面下になり、墳丘測量図に表されず、後円部は下段のテラス端部まで、前方部前端では下段斜面の中程までが図示されていることになる。市教委による確認調査の成果を参照すると、前方部でさらに 1mほどの位置に裾があり、後円部では下段の斜面分の 4mほどが裾までの距離になる。したがって、図上での墳丘全長 104mに 5mを加えた約 109mが実際の全長になる。同様に、後円部の直径は約 65m、前方部長約 50m、前方部幅 58mとなる。なお、墳丘の裾は前方部前端で標高 68m、後円部では標高 67mであり、テラスと同様の傾斜をもっている。

現状では東側のくびれ部から前方部にかけて裾部が外に張り出しており、造り出しの名残である可能性が考えられる。その南半部が比較的造り出しの形状を保っていると推測されるが、

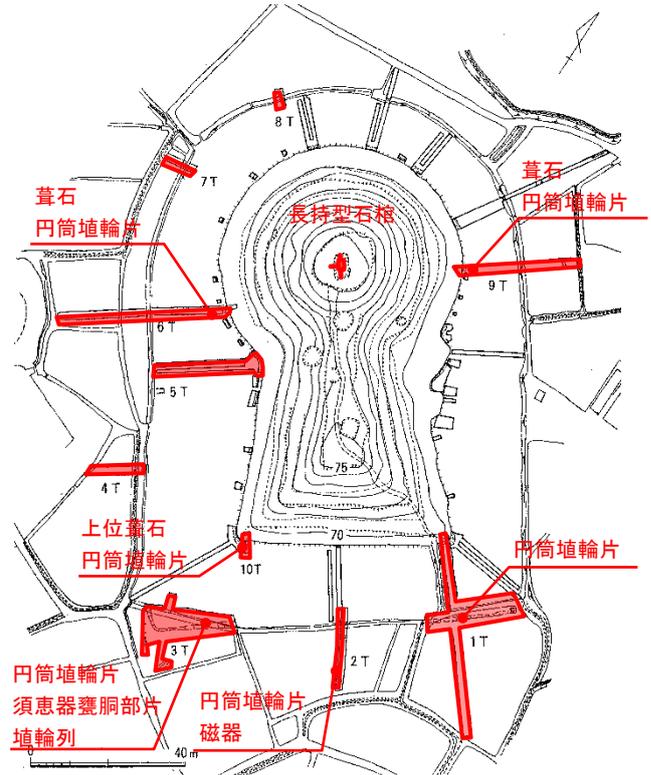


図 3-9 玉丘古墳調査概要

3. 史跡玉丘古墳群の概要

そこでは下段のテラスよりもさらに低い平坦面（標高 69.3m）があり、造り出しの上面とみてよいだろう。西側では造り出しの痕跡はなく、発掘調査によってもその存在が否定されている。

確認調査では、葺石の状況や外堤部の形状が明らかにされている。葺石は第1段テラスから墳丘裾までの斜面に葺かれていることが確認された。葺石斜面は上位と下位で傾斜角度が異なる。葺石は、まず周濠底に 30~40 cm 大の凝灰岩角礫を基底石として据え、傾斜角度の屈曲点まで 20~30 cm 大の石を積み上げていく。屈曲点から角度はやや急になり 10~30 cm 大の小ぶりの角礫をテラスの肩口まで積み上げている。

前方部正面の外堤部で両隅角部を確認し、外堤部東西幅は約 90m、隅部は円弧を描く隅丸状を呈することが判明した。また、外堤部上では 2.6m 間隔で 2 本の円筒埴輪底部が見つかり、外堤部にも埴輪列を有していたことが確認された。

葺石上面や周濠から出土した埴輪は墳丘部から転落した破片であり、全形を知る個体はない。黒斑を有する埴輪であり、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。

玉丘古墳は群中で最大規模を誇る前方後円墳であり、その規模は兵庫県内で第5位となる。その規模にふさわしく三段築成で葺石や埴輪列などの外表施設を持ち、長持形石棺を埋葬施設に持つ。長持形石棺はその初期のものであり、埴輪も黒斑を持っていて、川西編年のⅢ期に属し、ともに 4 世紀末に位置づけて矛盾はない。墳丘の形態については、古市古墳群にある津堂城山古墳（全長 208m 藤井寺市）の 1/2 の相似形になるという指摘が岸本直文によってなされている。津堂城山古墳はテラスの位置が不明なため、詳細な比較が困難であるけれども、その可能性は十分に考えられる。埴輪も畿内の製品に近いこと、長持形石棺も畿内で主流になるものであるので、玉丘古墳が畿内地域との深い結びつきによって成立したことは確実視できる。

玉丘古墳に關係する文献記録として『播磨国風土記』（第八卷古代 85）賀毛郡の玉野村の記載がとりあげられてきた。そこでは「国造許麻之女 根日女命」の墓が玉で飾られたことをもって、墓を「玉丘」、村を「玉野」と名付けた由来譚が記されており、その玉丘が玉丘古墳にあたとされてきたのである。風土記の記載はオケ・ヲケ皇子すなわち仁賢・顕宗天皇が播磨国美囊郡志染里に隠れたとする物語に付随する求婚譚として語られており、時期的には 5 世紀末から 6 世紀初めのことになるので、実際の古墳の年代である 4 世紀末とは合わない。しかし、記述に表れる玉丘が玉丘古墳であることは違いないので、8 世紀初めの風土記作成時における玉丘古墳の伝承として許可する必要がある。おそらく、それは、当時の播磨鴨国造氏の祖先伝承として伝えられていたのであろう。

玉丘古墳群は玉丘古墳の成立をもって始まり、以後、前方後円墳の小山古墳のほか、帆立貝式古墳の笹塚古墳、マンジュウ古墳など、大小さまざまな古墳が築造されており、地域の首長たちの奥津城としてふさわしい墓域を形成している。風土記に記された伝承の背景として、地域を統合し、また王権とも深い関わりをもった首長の存在があるということは確かである。



図 3-10 玉丘古墳石棺

（加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古）

2) 陪塚 1 号墳

玉丘古墳の後円部側西隣、標高 70mの段丘上に立地する。古墳の現況は、周囲に濠が巡る円丘部と南側に濠に接して方丘部状の高まりが存在し、方丘部の北側から東側にかけてL字に濠がめぐり、この形状から陪塚 1 号墳は後世に改変を受けた前方後円墳である可能性も考えられていた。

測量の結果、北側の円丘は現況で直径 20 mほどの正円形を呈し、墳丘裾は周濠の中にあるため、径 22mほどに復元できる。墳頂部には直径約 8mの平坦面をもつ。墳頂部平坦面の中央付近に陥没孔があり、盗掘坑の可能性もある。段築は不明瞭であるが、現状の裾、すなわち標高 70mラインで傾斜がゆるやかになっており、テラスになるものと推測される。したがって 2 段構築の円墳ということになる。このテラスの状況から判断して、前方後円墳が切断された可能性はほとんどなく、もともと円墳として築造されたと判断できる。なお、周濠の幅は現状で 4m前後である。

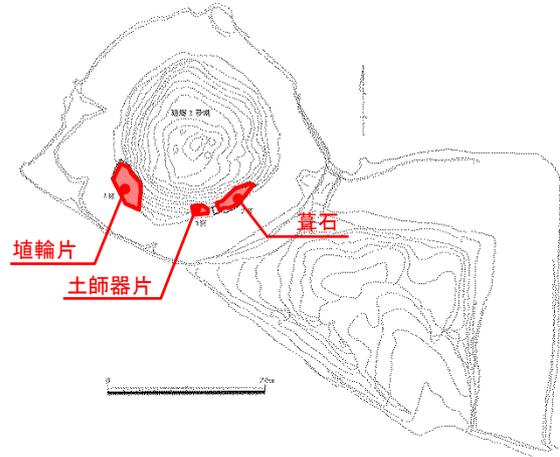


図 3-11 陪塚 1 号墳調査概要

円丘崩落部の調査時に、墳丘盛土直上に 20 cm大の凝灰岩角礫が並んだ状態で確認され、墳丘流出土から埴輪片、須恵器片が出土したことから、陪塚 1 号墳は葺石、埴輪列を有していたと推測される。埴輪は表面に黒斑を有する。須恵器は甕体部細片で時期の決定は難しく、古墳との関係はわからない。

墳丘上西側にはかなりの土量の後世の盛土が確認された。過去に周濠内の底さらえが行われたとの伝えもあり、当時の廃棄土の可能性が考えられる。

陪塚 1 号墳は 5 世紀前半に築造された円墳である。黒斑を有する埴輪が出土したことから、おそらく玉丘古墳に続いて築造された古墳と考えられるが、玉丘古墳との関係、南側の方丘状の高まりとの関係など解明できていない部分が多い。

(加西市史 第7巻 史料編 I 考古)

3) 陪塚 2 号墳

玉丘古墳の後円部側東隣、陪塚 1 号墳と対の位置にある標高 70mの段丘上に立地する。古墳の現況は、15×7m程度の台形状に高さ約 2.5mの墳丘の一部が残っており、東側は溜池、周囲は耕作地として後世の開発が進



図 3-12 陪塚 2 号墳

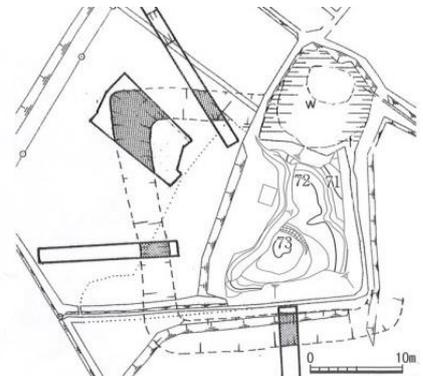


図 3-13 陪塚 2 号墳調査概要

んでいる状況であった。確認調査で耕作地から周濠が見つかり、古墳は一辺 24mの方墳であることが判明した。このことから、現存する墳丘部は墳丘南側、全体の約 1/3 に相当する部分

3. 対象地区の概要

であり、埋葬主体部はすでに削平されて不明である。

外部施設として幅約4mの周濠がめぐる。周濠の墳丘裾側から埴輪片、凝灰岩片が出土していることから、陪塚2号墳は葺石、埴輪列を有していたと推測される。出土した埴輪は黒斑を有する円筒埴輪である。

陪塚2号墳は5世紀前半に築造された一辺24mの方墳である。おそらく玉丘古墳に続いて築造されたと考えられるが、墳丘部のほとんどが後世の開発によりなくなっており、玉丘古墳との関係を推測する情報は少ない。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

4) 壇塔山古墳

古墳は、玉丘古墳の南100m地点、標高70mの段丘上に立地する。

墳丘径17m、墳丘残存高1.4mの円墳である。外部施設として幅2.5m前後、深さ0.2mの周濠がめぐる。埋葬主体部は削平されており不明である。周濠から黒斑を有する円筒埴輪片が出土したことから、壇塔山古墳は玉丘古墳やクワンス塚古墳と相前後する時期に築造された円墳と推定される。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

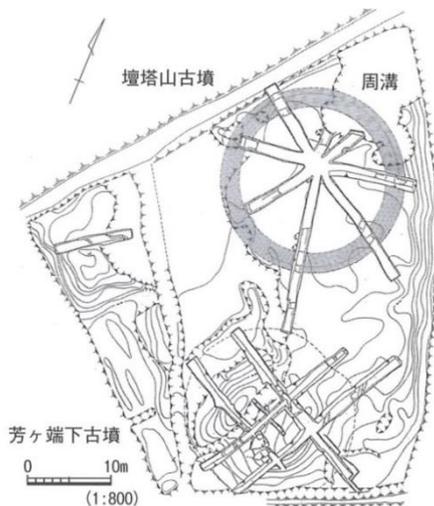


図 3-14 壇塔山古墳調査概要



図 3-15 壇塔山古墳

5) クワンス塚古墳

玉丘古墳の西100m地点、標高69mの段丘上に立地する。

古墳の調査時の現況は、墳丘部には雑木が生え、2段築成の円丘部が明確であり、周囲には周濠がめぐり、農業用水として活用されていた。一段目墳丘部南西側は周濠が途切れ外堤部と接続していたことから、当時は造り出し部である可能性も考えられていた。古墳は2段築成の墳丘径35m、墳丘高5mの円墳である。外部施設として墳丘斜面に凝灰岩

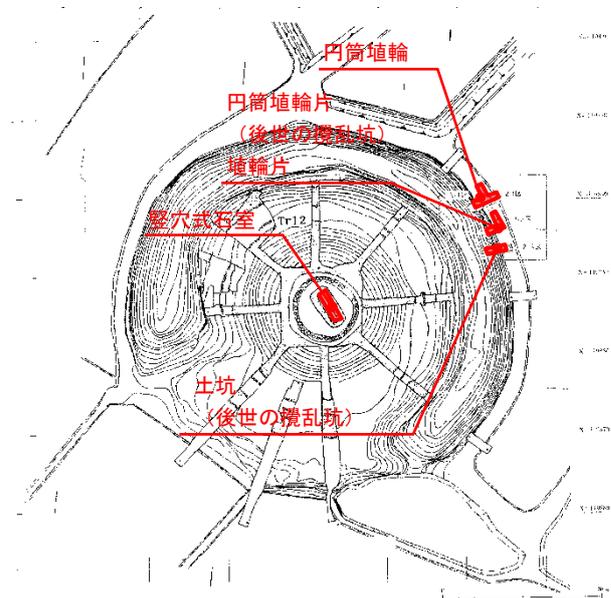


図 3-16 クワンス塚古墳調査概要

角礫を用いた葺石が施される。テラス及び墳頂部には溝状掘方に埴輪を樹立し、墳頂部では径14.8mの円形状に埴輪列をめぐるせている。墳丘周囲には幅10mの周濠がめぐるが、後世に水量確保のためであろうか、濠底は掘削を受けている。南西側の周濠の途切れは調査の結果、後世の盛土による改変であることが判明した。外堤部にも埴輪が設置されている。

墳丘北西部に10×3.5mの台形を呈する造り出し部が設けられている。墳丘部との境は一段低くなり、その斜面には葺石状の凝灰岩が並べられている。造り出し部の端部には埴輪が約1.2m間隔に設置されることにより方形区を設け、区画内には鶏形埴輪などの形象埴輪、杵形や円板形の土製品、籠目土器などが置かれている。

埋葬主体部は墳頂部の竪穴式石室である。天井石はすべて抜き取られ、盗掘を受けている。石室は全長約5m、幅約1mをはかる。石室底には割竹形木棺の痕跡が残り、棺内には赤色顔料が塗布されている。棺内からは副葬品の鉄器類が出土した。



図 3-17 クワンス塚古墳

クワンス塚古墳は5世紀前半に築造された径35mの円墳で、おそらく玉丘古墳に続いて築造された古墳と考えられる。調査により造り出し部の存在が判明し、形象埴輪や数多くの土製品が用いられた祭祀の様相を示す数多くの資料が発見された。同じ5世紀前半代の前方後円墳である行者塚古墳（加古川市）の造り出し部でも、同様の土製品が見つかっており、クワンス塚古墳は加古川流域での古墳祭祀を考える上で重要な古墳と言える。

（加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古）

6) 実盛塚古墳

クワンス塚古墳の南約50m地点、標高69mの段丘上に立地する。発掘調査は行われていない。

現況では東に田、西側に池があり、墳丘にも改変が及んでいるが、比較的残りのよい南側斜面の状況から円墳であることがわかる。ここと北側の墳丘裾から直径約18mをはかる。墳丘裾からの高さは、最高所で約3mになる。テラスは観察できない。また、墳頂の中心近くが南北3m、東西3.5m、南北5.5m、高さ0.7mほどの高まりがあり、墳頂の平坦面は不明瞭である。したがって、墳頂部にも改変の手が及んでいる可能性が考えられる。

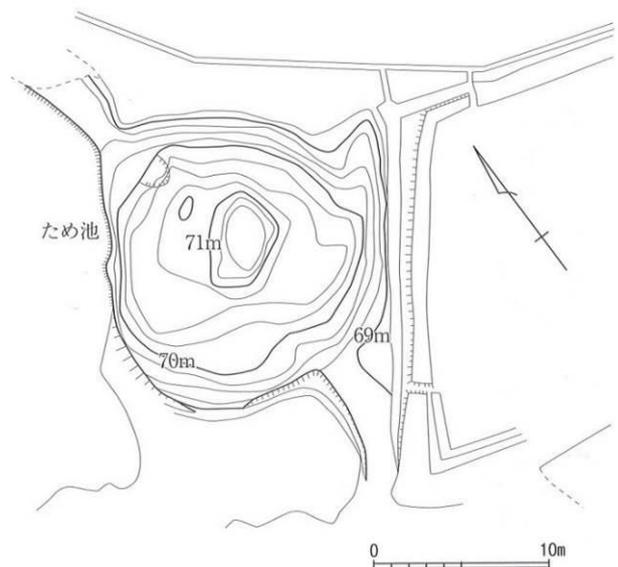


図 3-18 実盛塚古墳調査概要

3. 対象地区の概要

実盛塚古墳については、玉丘古墳群を構成する古墳であるものの、その内容についての手がかりがほとんどない。南の山裾には群集墳が点在しており、また後期の芳ヶ端下古墳も近くにあることから、後期古墳である可能性も十分に考えられる。ただし、横穴式石室とした場合、まったく石材が露出していないのが不審である。したがって、現状では時期についても保留しておきたい。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

7) マンジュウ古墳

玉丘古墳群の中で西から4番目の支群に位置し、標高 69mの段丘尾根上に立地する。古墳の調査時の現況は、墳丘部は土取りにより大きく削平を受け、直径 35m、高さ 1mの円形基壇状に残っており、墳丘裾部は垂直に削平されていた。周濠部はすでに埋没し、水田耕作地として活用されていたが、水田畦畔に周濠の平面形状の名残を留めている。

古墳は全長 45.4mをはかる2段築成の帆立貝式古墳である。規模は、後円部径 40.0m、2段目墳丘径 28.2m、テラス幅 2.6m、前方部長 7.8m、前方部幅 25.6m、くびれ幅 18.8mをはかる。前方部東側の後円部に造り出しが付き、造り出し長 5.0m、造り出し幅 5.0m、前方部と造り出しの間隔 4.0mをはかる。中軸線方位はN-65°-Eである。

外部施設として葺石、テラス上に埴輪列が確認された。葺石は周辺地で採集されたと考えられる凝灰岩角礫で、基底石に 35~55cm大、葺石に 15~25cm大の石を使用している。埴輪列は幅 30~40cmの溝状掘方を設け、5mあたり 19本の円筒埴輪が設置されている。埴輪列の復元円周は 100mをはかることから、テラス上に 380本の埴輪が設置されたと算出される。周濠は楕円形状を呈し、周濠幅は北東部 7.3m、北西部・南東部 10.0m、前方部側 10.0~12.0mをはかる。埋葬主体部については、後世の削平により不明である。

埴輪列の埴輪のほか、周濠から埴輪、須恵器が出土した。

マンジュウ古墳は 5世紀前葉~中葉に築造された全長 45.4mの帆立貝式古墳である。玉丘古墳群の中規模古墳のひとつであり、首長墓の系譜上にある古墳といえる。同じ帆立貝式古墳である笹塚古墳と相前後する築造時期であり、規模もほぼ同一規格と考えられる。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

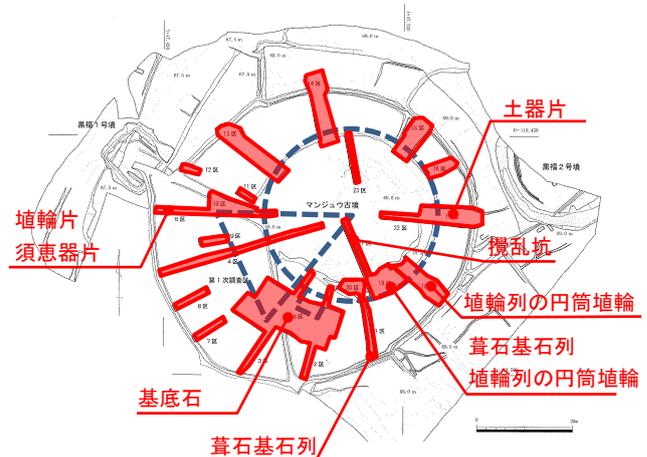


図 3-19 マンジュウ古墳調査概要



図 3-20 マンジュウ古墳

3. 対象地区の概要

9) 逆古墳

逆古墳は、玉丘古墳群の中で西から5番目の支群に位置し、標高 70mの段丘尾根上に立地する。

古墳の現況を見ると、墳丘部は土取りにより大きく削平を受け、墳頂部に大きな攪乱坑があり、墳丘裾部は垂直に削平されている。残された墳丘部の形状から、墳丘径約 30mの円墳に推定されている。周濠部の推定地は水田耕作地として活用されていたが、確認調査の結果、幅 2.5~6.5m、深さ 0.6mの溝が検出され、溝から埴輪片、須恵器片が出土した。溝の規模、方向等から古墳ともなう周濠とは考えにくく、逆古墳は周濠を持たない可能性が高いといえる。

逆古墳は径 30mの円墳と推定される。規模的には玉丘古墳群の中規模古墳のひとつといえるが、詳細は不明である。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

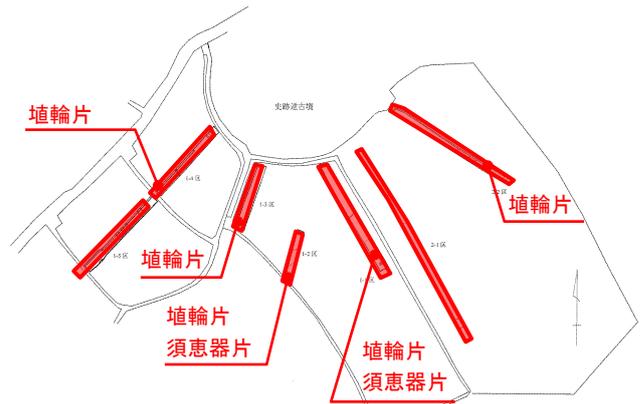


図 3-23 逆古墳調査概要



図 3-24 逆古墳

10) 北山古墳

玉丘古墳群の中で標高 90mの丘陵尾根端部に立地する。

古墳は墳丘径約 25m、墳高 4.7mの2段築成の円墳である。2段目墳丘径 18.0m、テラス幅 1.5~2.0mで、1段目裾からテラスまでの高さは 1.5mをはかる。

外部施設として葺石、テラス上に埴輪列が確認された。第1段目葺石は一部地山岩盤を利用している。第2段目葺石は基底石に 30~50 cm大、葺石に 10~30 cm大の石を使用し、高さ 0.8m以上を積み上げている。埴輪列は幅 40 cmの溝状掘方を設け設置するが、埴輪列の復元径から、テラス上に約 400本の埴輪が設置されていたと算出できる。

埋葬施設は墳頂部中央からやや東に位置する竪穴式石室である。主軸は N-17° -E で、石室規模は、南北 2.3 m、東西 1m、残存高 0.3mをはかる。石室石材は 40~50 cm大、厚さ 10 cm大の角礫を積み上げている。石室内から鉄器や玉類が出土したが、後世の攪乱をうけて原位置はわからない。墓壇は南北 3.8m、東西 1.9mの方形掘方が推定される。

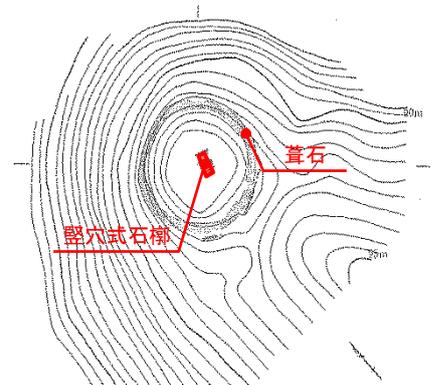


図 3-25 北山古墳調査概要



図 3-26 北山古墳

埴輪、須恵器、鉄器、玉類が出土した。

北山古墳は6世紀初頭に築造された径25mの円墳である。北条盆地周辺の山頂に立地する保木山1号墳や石黒山2号墳と比較しても、規模、主体部構造、副葬品など格差があり、首長墓の系譜上にある古墳と言える。時期的には玉丘古墳群の最終段階の首長墓と考えられる。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

11) 亀山古墳

市街地北辺を東西方向に遮る城山丘陵の東端に位置し、標高162mの丘陵頂部に立地する。丘陵の裾は84mであり、比高差は78mをはかる。丘陵の南裾には逆池古墳群があり、南側の丘陵上には5世紀末の北山古墳がある。この古墳からの眺望は、玉丘古墳と異なり、西方が遮られているけれども、それを除くと、万願寺川の流域から普光寺川の流域を広くカバーし、遠く加古川まで届く。昭和12年に地元の有志により主体部が発掘され、京都帝国大学の梅原末治らにより記録が作成された。その後、地元では、玉垣や石碑が建立され、さらに昭和28年に鴨国魂神社が建立されるなど、保存と顕彰が進められた。昭和43年には加西市の指定文化財となり、「いこいの村はりま」の背後の公園として市民に親しまれてきた。

市史編さんにあたり平成14年に亀山古墳の測量調査を実施したが、さらに平成16年には範囲を確認するための発掘調査が市教委により実施されている。

墳丘の形態は長径48m、短径44m、高さ7mの不整形な円墳であり、もともとの地形を最大限に利用して築造されている。したがって、盛土はほとんどなく、岩盤を整形して墳丘が構築されており、墳頂部も岩盤が露出している。発掘調査の結果、段築の痕跡は認められず、埴輪の出土状況からもテラスを設けた可能性は低いと判断されている。そして、葺石も施されていないことが明らかになっている。墳丘の裾は、周濠や基底石といった明瞭な区画施設をもたず、埴輪列をめぐるせることによって表現されている。

埴輪は溝状の据え付け穴を掘って据えつけられており、墳丘の北側に比べて南側に密に並べる傾向があることが判明している。約3.7mごとに埴輪がなく、溝状の据え付け穴も途切れ、かわりにピットが検出されることから、木柱あるいは木製樹物が一定の間隔で立てられていた

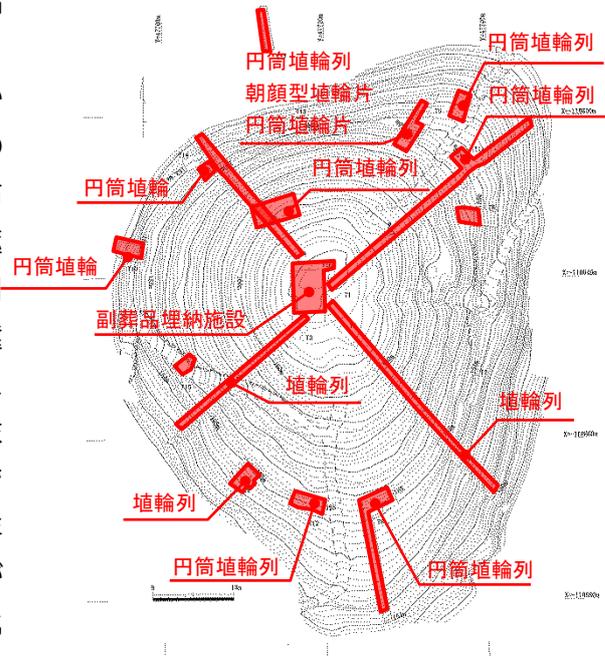


図 3-27 亀山古墳調査概要

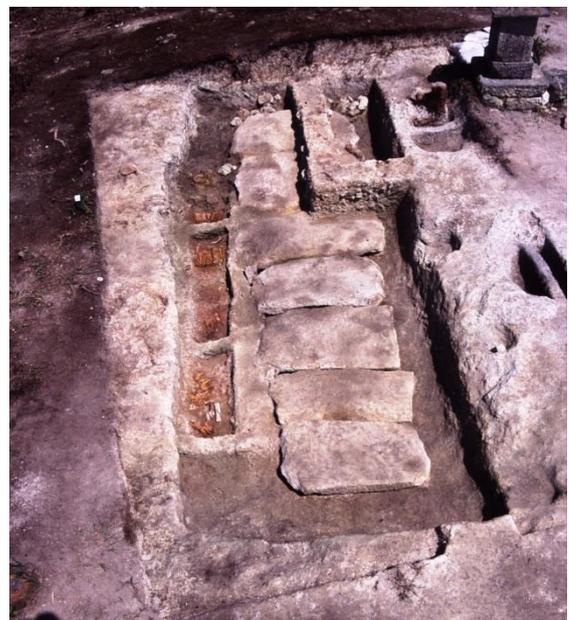


図 3-28 亀山古墳

3. 対象地区の概要

ことが想定される。

墳頂部には、2基の埋葬施設が存在する。第1埋葬施設は、墳頂部の東西寄りに築かれた石蓋の土壌である。南北 6.0m、東西 2.2mの長方形を呈する墓壇の東寄りに土壌が掘削され、7枚の石蓋が架けられていた。墓壇の側壁に赤色顔料が塗られていたことが確認されている。なお、石蓋の材質は火山礫凝灰岩で、亀山の丘陵を構成する岩石と一致することが判明している。この第1埋葬施設の西側に、副葬品埋納施設が存在する。この施設は、南北 3.1m、東西幅 35～45 cm程度の箱形を呈する。赤色顔料が面的に確認されている。第2埋葬施設は、墳頂部の南東寄りに築かれた土壌である。全長 3.8m、幅 1.4mをはかる。

遺物は、墳丘裾部より埴輪、第1埋葬施設より武器・武具をはじめとした金属製品、副葬品埋納施設より、武器・農工具類、第2埋葬施設より武器・武具がそれぞれ出土している。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

12) 小山古墳

玉丘古墳の中で西から3番目の支群に位置し、標高 67mの段丘尾根上に立地する。開発により墳丘部は宅地になり、古墳形状を水田地割りに残すだけの状況であったが、区画整理事業にともない、平成2年度に発掘調査が市教委により行われた。

古墳は全長 78.8mをはかる前方後円墳である。規模は、後円部径 48.8m、前方部長 30.2m、前方部幅 27.5m以上(復元値 55.1m)をはかる。東側括れ部に台形平面の造り出しが付き、造り出し長 4.2m、造り出し幅 10.0mをはかる。

外部施設として葺石、埴輪列があったと考えられ、後円部南西側の外堤裾付近から完形の円筒埴輪が出土したことから、外堤にも埴輪が樹立していたものと考えられる。周濠は馬蹄形を呈し、周濠幅は 8.9～9.6 mをはかる。周濠から埴輪、須恵器が出土した。後世の削平により埋葬主体部については不明である。

小山古墳は5世紀前葉～中葉に築造された全長 78.8mをはかる前方後円墳である。玉丘古墳群では玉丘古墳と小山古墳だけが前方後円墳であり、古墳の規模からも首長墓の系譜上にある古墳といえる。

(加西市史 第7巻 史料編Ⅰ 考古)

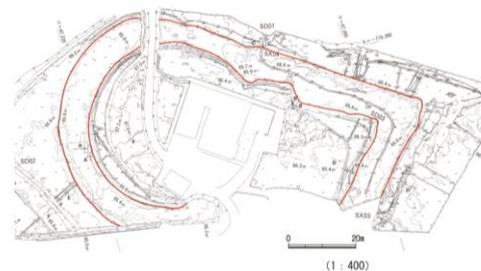


図 3-29 小山古墳調査概要



図 3-30 小山古墳